

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02284

研究課題名(和文)常磐津節の復元的上演に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on reconstructive performance of "Tokiwazu-bushi"

研究代表者

竹内 有一 (TAKEUCHI, Yuichi)

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・教授

研究者番号：60381927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：常磐津節の伝承資料の一つである江戸期古版浄瑠璃本を活用して、常磐津節の復曲(復元的上演)を進めていくための基礎的研究を実施した。

使用した古版浄瑠璃本は、2015年に常磐津家元から発見された新出稀覯本を多数含む計101書目(約600丁)である。保存修復学の新しい手法を考案しながら、全丁の虫損修繕を進め、デジタル撮影による影印および簡易目録を作成し、その一部をweb上に公開した。また、修繕した古版浄瑠璃本から選定した二題「緑増常磐寿」「帯文桂川水」の復曲制作に取り組み、2020年2月の日本伝統音楽研究センター主催公開講座において、研究経過の報告、作品解説、復曲試演を行い、研究全体を総括した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古版浄瑠璃本の修繕を試行錯誤しながら進めるなかで、新しい修繕手法を考案し、それらを学会発表や大学院生との共同作業を通じ、将来の保存修復学にフィードバックした意義は大きい。新出稀覯本が多数含まれる、常磐津家元所蔵の古版浄瑠璃本について、その目録と撮影画像をweb上に公開したことは、常磐津節の将来の歴史研究、演奏研究を進める上で貴重な基礎資料を提供することになった。

復元的上演については、複数の演奏者と研究者が密接に連携しあい、基礎的な手法の研究と音楽的制作を進めることにより、常磐津節の将来の伝承および復元的上演の方法に、新たな可能性を開拓した。

研究成果の概要(英文)：We have succeeded in research on reconstructive performance of "Tokiwazu-bushi" by using a song book published during the Edo period.

We searched a total of 101 song books, including many new rare books, which were found in the house of the school head of "Tokiwazu-bushi" in 2015. And by devising a new academic method, we fixed all the damaged parts of the song book, made a catalog and digital image of the song book, and published some of them on the web. In addition, we selected two from the repaired song books, "midorimasu-tokiwano-kotobuki" and "obinoaya-katurano-kawamizu", and worked on these reconstructive compositions. Then, in February 2020, at the open lecture sponsored by the Japan Traditional Music Research Center, we summarized the whole research by reporting the research progress, explaining the works, and performing the music.

研究分野：近世日本音楽史、常磐津節の演奏

キーワード：常磐津節の伝承 復曲 古版浄瑠璃本 和紙と木板本 虫損補修 三味線音楽 歌舞伎浄瑠璃

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 常磐津(ときわす)節は、江戸中期の1747年(延享4年)に成立した浄瑠璃(語り物音楽、三味線音楽)の一種目である。京都生まれの初世常磐津文字太夫が江戸で興し、江戸歌舞伎の所作事(舞踊)に欠かせない音楽として大成し、現在なお歌舞伎の四大音楽(ほかに長唄・義太夫節・清元節)の一つとして、世界遺産である歌舞伎を支えている。1981年には重要無形文化財の総合指定を受け(常磐津節保存会)、その技芸の継承がはかられてきた。

(2) 常磐津節の伝承レパートリーの課題

常磐津節には、約400の演目が現行する。歌舞伎で初演された演目が半数強を占め、時代別にみると、江戸期に初演された演目が約160、明治期から戦前が約140、戦後が約100である。このうち、江戸期の約160演目は、明治期から現在までに100~200ほどの伝承が途絶えて生き残った数であり、その一方で明治期から戦後に生まれた演目が意外に多い(以上の各数値は、引用文献に基づく)。つまり、常磐津節は、いつの時代においても現代の音楽として受容されてきた側面があり、新陳代謝を繰り返してきたといえる。したがって、伝承が衰退した要因を演目ごとによく考察して有効な手段を講じないと、さらなる古典的演目の減少(廃絶曲の増加)と伝承の陳腐化を招く恐れがある。

(3) 伝承研究における正本(浄瑠璃本)の意義、稀観正本の新発見

江戸期の楽譜がほとんど存在しない常磐津節においては、初演時に出版される浄瑠璃本の一つ「正本」(しょうほん)は、音楽伝承の発端を示す貴重な資料である。常磐津節の正本は、常磐津節創流期から流派の公認を得て1970年代頃まで継続的に出版され、初演時の詞章、一部の曲節譜など音楽的情報、演奏者名とその格付け、演奏手法(語り分け、他種目との掛合演奏の分担等)などが記される(引用文献)。したがって、各演目の伝承を振り返り、現行レパートリーの課題に対処するに際しては、最初に参照すべき有用な資料である。

2015年に、常磐津節の家元、常磐津文字太夫師の自宅から大量の古版正本が発見され、2016年、研究代表者は、常磐津家元の協力と京都市立芸術大学特別研究助成により、そのうちの8巻の合綴本を予備調査した。その結果、1770年代から1830年代にかけて出版された初版本が101点(約600丁)、その約6割が新出の稀観本であると判定した(研究代表者作成の常磐津正本書誌データベースに基づく考察)。いわば50年に一度のレベルの稀観本の大量発見であり、前述の課題の対処にも大きく役立つことになる。しかし、8巻とも虫喰いによる損傷が甚だしく、閲覧・撮影に耐えられる状態ではない。まずは、全面的修繕を着実に進めて、撮影・翻刻によるデジタル化、書誌的調査、音楽資料としての内容の精査を行い、この貴重な新出稀観本の活用と保存を全うする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 重要無形文化財である常磐津節(歌舞伎浄瑠璃)の伝統を再検討し、研究と実演の現場を結びつけた、伝統芸能の新たな展開を導くことを目的とする。そのために、伝承実態と歴史的通説を洗い直し、伝承が途絶えた(または途絶えつつある)演目の復活と、演奏手法の復元と新工夫を試みていく必要がある。

(2) 具体的には、以下のような研究課題に取り組むことを目指す。

常磐津家元所蔵、新出常磐津正本(浄瑠璃本)の虫損を修繕するとともに、新たな修繕方法を開拓する。

新出常磐津正本の書誌的調査と目録化、デジタル撮影と画像の整理保存を行い、それらをweb公開する。

復元的演奏にふさわしい演目を選定し、読み合わせや翻刻による作品研究を踏まえ、望ましい上演本文を補綴する。

初演資料・初演以後の資料・現行の音楽伝承等を総合的に考証し、復元的上演としての復曲制作を行う。

複数の演奏家との共同によって復曲を練り上げ、公開試演を行う。

3. 研究の方法

(1) 研究組織

研究代表者の竹内有一は、研究事業の全体を統括・調整した。また、自らが常磐津節を伝承する演奏家(芸名:常磐津若音太夫)の立場として、他の演奏家たち(研究協力者)と共同作業を行った。研究代表者は、常磐津節の職業的演奏家(太夫方、常磐津協会・関西常磐津協会正会員、芸名:常磐津若音太夫)として、歌舞伎興行や演奏会で活動する大半の職業演奏家と20年以上の共演を続けており、自らの身体において常磐津節を実践・伝承する立場にある。そうした立場を生かし、研究と演奏現場を結びつける意図を持つが、単なる古典の継承保存に留まるのではなく、より実り豊かな音楽文化としての古典の再興を目指すものである。

研究分担者の宇野茂男は、日本画模写とその保存修復の専門家である。前述の新出正本の修繕に際し、修繕の実務を担当した。単に修繕を行うのではなく、研究代表者および所蔵者とともに資料の特性を分析し、使用する料紙や用具、修繕の具体的手順について、対象資料ならではの特徴・

状態を踏まえた独自の的方法論と技法を構築することを目指すものである。和紙の生産者や保存修復専攻の大学院生（研究協力者）との連絡調整も担当した。

研究協力者の常岡亮は、新出正本の所蔵者として、修繕作業の実務に関わりながら、資料の保存と公開の方法を検討した。また、演奏家（芸名：常磐津小文字太夫）の立場で、復曲制作に関し必要な助言と協力を行った。このほか、演奏家数名（常磐津協会正会員など）、保存修復専攻の大学院生ほか数名を研究協力者とした。

(2) 常磐津家元所蔵新出正本の修繕

修繕の対象となった資料は、2015年に常磐津家元から蔵出しされた全8巻の合綴本である。全101点の正本が含まれ、総丁数は約600丁であった。2016年度京都市立芸術大学特別研究助成（研究代表者：竹内有一）によって、寸法・丁数などの予備調査を済ませ、2巻分の修繕にも着手していたので、その成果を踏まえ、修繕の済んでいない6巻分について、1年間に2巻ずつ修繕を進める計画を立てた。

修繕作業は、資料を綴じている「糸」と「こより」を切断し、袋綴じ状態の本紙を1丁ずつ開いていく解体作業から始めた。虫害による損傷が著しいため、ピンセットを使って慎重に解体しなければならなかった。解体後、登録番号を記入した付箋（撮影用と裏打ち用の2種）を1丁ごとに付与した。解体後、本紙にこびりついた虫の糞・死骸・埃をピンセット・刷毛・筆で除去する清浄を進めたが、これが最も手間を要した作業であった。さらに、損傷部分を和紙で繕う作業、裏打ち、製本を経て、本を元通りにするまで、実に多くの時間とバイト人件費を要した。繕い用紙については、修繕に適した和紙の性質を考察し、黒谷の和紙生産者とともに漉く和紙の仕様について打合せを重ね、手漉きの和紙を製作した。

(3) 常磐津家元所蔵新出正本の撮影と目録作成、資料公開

修繕作業と並行して、全8巻の書誌調査を進め、資料の出自や所蔵の経緯の考察、正本全冊のデジタル撮影と画像データの保存・整理を進めた。すべての正本について、上演年月と名題を考証し、基本的な書誌事項を記した目録を作成した。また、目録と一部の画像データを掲載するwebコンテンツを作成した。

(4) 復曲候補の選定

候補曲の選定は、101点の正本から廃絶曲をリストアップすることから始めた。復曲の目的は、作品の生まれた時代に使用されていたであろう様式の諸相を捉え、それらを実践的に研究することとし、次の諸点を復曲の要件とした。すなわち、再演が待望される作品を目指すこと、あらすじがわかりやすいこと、登場する人物像がつかみやすいこと、何かしらの現代性があること、将来は振りを付けて上演される機会の創出も視野に入れること。このような要件を意識しながら、廃絶曲とみられる正本の流し読みを進めた。

候補曲の絞り込みは、次のような観点で行った。すなわち、作品内容の側面については、常磐津で伝承される同様のテーマ・素材の作品を避けること（差異化が困難、新たなテーマの開拓を優先）京都を舞台とする作品に着目すること（御当地物）心中道行物を積極的に検討すること（現行曲が少ない）能楽由来の作品に留意すること（テーマの汎用性）正月の曾我物を検討すること（曾我物の正本が多い）。その他の側面については、文字譜の版刻された正本を積極的に検討すること（復曲の素材となる音楽的情報の活用）試演会の編成を考慮すること（約15分の曲と約30～40分の曲の2題を選定）。以上のような要件と観点によって2題を選定した。

(5) 復曲制作（台本補綴、作曲）と公開試演

復曲の制作と演奏を行う演奏者・作曲者を選出し、共同作業で復曲制作を進めた。選定された2題について正本の熟読を進め、現行伝承との詞章の異同、語り分けの指示（太夫の演奏分担）、語り・三味線のパターンや表現を表示する譜（朱）や口三味線の書き込み、役者・衣装・大道具など音楽以外の要素や演出についてわかること等に留意して、復曲用の上演台本を補綴した。復元した演目の公開試演、修繕した正本の展示など、研究の成果公開を目的とした公開講座を日本伝統音楽研究センターにおいて主催した。

4. 研究成果

(1) 常磐津家元所蔵正本の全体像と価値を明らかにした

研究対象となった常磐津家元所蔵の全8巻（全101点の正本を含む合綴本、約600丁）を修繕することによって初めて、資料の閲覧が可能となった。常磐津家元代々の収藏品という素性の確かさもさることながら、管見によれば、世界に一点しかない新出本・稀観本を多数含み、初めて存在が確認された稀曲（「緑増常磐寿」など）、現行曲に関わる新出本（「両顔月姿絵」初版本など）も確認された。常磐津節の歴史研究・音楽研究にとってかけがえのない情報を含む文化財といえる。常磐津正本のコレクションとして世界有数の質と量を備える全容を、目録作成によって明らかにした。また、「緑増常磐寿」については、その内容の特異性にも着目し、資料紹介（引用文献）を執筆した。

(2) 貴重資料の公開と永久保存の両立

研究対象となった常磐津家元所蔵正本は、そのすべてのデジタル撮影を行うことで、資料現物を出納せずに、将来の研究用途での公開利用に備えると同時に、永久保存を可能にした。また、所蔵者の意向に基づく範囲で、目録と一部の画像について、web上での公開を行った（「常磐津正本集 京都芸大 竹内研究室編」<https://sites.google.com/view/tokiwazu-shouhon/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>）。今後、多くの研究者、演奏家がこれらの資料を弾力的に活用することが可能となった。常磐津節の演目は歌舞伎と関わりが深いので、歌舞伎の興行・研究に携わる関係者にも重宝されるであろうし、浮世絵など近世出版物や近世文学の研究者にも有用な資料となる。

(3) 異分野間の協力と工夫、版本に関わる保存修復学への貢献

研究資料の修繕から楽曲の復曲までという領域を越えた複数の課題を、音楽学・芸能研究と保存修復学という異分野の研究者が共同して、一つのプロジェクトとしてすべて自前でやったことは、それ自体が独創的成果であったといえよう。研究分担者は、約600丁という大量の版本資料の修繕を効率的に確実に繕うため、資料の現状と特性を十分に見極めながら、複数の新たな手法の開発を検討し、いくつかの新手法を実現させた。

その一つは、修繕用和紙の色あいのパターン化である。保存状態や刷られた時期等によって、本紙の色合いは1点ずつ異なるが、すべての色合いにあわせて修繕用和紙を取り揃える（漉く、着色する）ことは困難である。そのため、本紙の色合いを総合的に検討し、赤・白・黄という3パターンの色味を準備した（いずれも色味のわずかな違いで、赤・黄は天然染料で薄く着色、白は無着色）。

二つめは、レーザー加工機による繕い用和紙の作成である。2017年度までは、損傷部分に沿って修繕用紙を手でちぎって繕う一般的な手法であったが、2018年度からは、撮影画像をもとに、損傷部分をトレースしたデータを作り、そのデータをもとに繕い用の紙片をレーザー加工機で自動的に切り出し、各紙片をパズルのように本紙に貼り込んで繕った（引用文献）。なお、溶解した和紙の繊維をスポイトに詰め、それを虫損箇所注入して繕う方法も考案し実験したが、芳しい結果が得られず採用されなかった。

(4) 研究者と演奏家の垣根を越え、次世代への伝統を作る

研究者と演奏家がそれぞれ主体となって、常磐津節の正本研究および伝承調査を進め、その復元的上演を共同で行おうとした点に、新しさと学術的特色がある。復曲制作は、監修者・作曲家・演奏者の選出、2題の作品「緑増常磐寿」「帯文桂川水」の選定、台本の補綴等によって進められたが、いずれも演奏家と研究者の共同作業であった。初演当時の時代背景と作品の特色を考察しながら台本の読解を深め、監修者の指導のもとに約5ヶ月をかけて復曲案（浄瑠璃の節付け・三味線の手付け）を補訂し、演奏の稽古に取り組んだ。復曲2題の概要と選定理由は、以下の通りである。

「緑増常磐寿」は、常磐津右文字太夫・初代岸沢九蔵開曲、作詞者未詳。管見によれば、開曲後の再演・伝承の機会は皆無であろう。選定理由は、初代文字太夫が存命した安永後期の古い作品であること、このたび存在が初めて確認された新出稀覯の正本であること、正本に文字譜が版刻されていること、女性演奏者の名義を詞章に詠み込んだ珍しい趣向であること（18世紀後期に女性芸能人が輩出したことを示す史料としても貴重）、詞章の分量がほどよく一五分程度で収まる可能性が高いこと。夫婦の縁や人間関係の睦まじさにちなんだ事物や語句が連綿と綴られ、起承転結の流れがつかみにくいという難はあるが、祝儀物としての格調高さ、正月の歳旦物のめでたさに女性の華やぎを加味した復曲を期待して選んだ。本の損傷が著しく、初丁裏から第2丁表にかけての判読不能部分のあたりは省略することにした。文字譜については、私の研究者・実演家としての経験則（現行曲と正本の総合的考察）を復曲構成時の参考情報として提供したが、もとより部分的な指標しか得られない記譜なので参考程度に留めることにした。この正本の書誌と詞章については、引用文献に記載した。

「帯文桂川水」は、二代目常磐津文字太夫・三代目岸沢古式部開曲、桜田治助作詞。管見によれば、幕末頃まで桂川物の代表的な稽古浄瑠璃として伝承されていたが、明治以降は次第に廃れたとみられ、近年の伝承事例は確認できなかった。同版の正本はいくつかの所蔵機関にあり活字本も多数。選定理由は、京都を舞台にした御当地物であること、心中道行物であること（本筋の悲哀と入れ事のおかしみの対照感が良い）、全体の詞章が読みやすく内容も平易であること。前述の要件と観点に最もかなう候補の一つであると考えた。復曲に際しては、次のような方針でのぞんだ。すなわち、お半長右衛門道行の本筋に対し入れ事が冗長気味であり、上演時間の制約もあるので、入れ事のクドキに相当する部分三箇所は、節付け・手付けを施さず、長セリフで語ることにした（詞章を変更せず上演時間を短縮、全体の運びを軽くした）。同様に、お袖と惣兵衛の出、米市の出は、必要最小限の詞章に補綴。補綴は省略のみで改変・追加は行わず、詞章中の地名や通り名は作品の理解を助けるので省略しなかった。文字譜は版刻されていないので、音楽的構成については、常磐津節や他の浄瑠璃で現行される道行曲や桂川物を、時代背景等も加味しながら参考にした。楽曲解説と詞章は、引用文献に記載した。

2020年2月の日本伝統音楽研究センター主催公開講座において、研究経過の報告、復曲作品の解説、復曲2題の試演など、研究全体を総括する発表を行い、それらの概要と資料を収録したパンフレット（引用文献）も作成した。この公開講座については、研究代表者のインタビュー

記事「常磐津で「お半長右衛門」 桂川への心中物語、京都市立芸大が復曲」が『京都新聞』2020年2月17日朝刊に掲載され、研究成果の社会的発信に貢献した。公開講座の概要と復曲制作のスタッフは、以下の通りである。

タイトル 240年を経てよみがえる常磐津2題 常磐津家元所蔵浄瑠璃本の修復と復曲
(日本伝統音楽研究センター第56回公開講座)

日時 令和2年(2020)2月9日(日曜日) 14時30分~16時30分

場所 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

司会解説 小西志保・竹内有一

内容 報告「史料の発見、修復から復曲まで」(竹内有一・常岡亮・小西志保・宇野茂男)
解説と復曲1「緑増常磐寿」
解説と復曲2「帯文桂川水」

演奏 (浄瑠璃)常磐津 小文字太夫・若音太夫・千寿太夫、(三味線)岸澤 式松・満佐志
(復曲制作)

監修 常磐津文字太夫

浄瑠璃 常磐津小文字太夫

構成・三味線 岸澤式松

詞章補綴 竹内有一・常岡亮・小西志保・櫛田典子

<引用文献>

竹内有一『常磐津節の伝承 現行曲調査一覧』Web コンテンツ、2013(JSPS 科研費22520144による成果の一部)

竹内有一「邦楽・邦舞にみる復活・復曲」『楽劇学』18号、2011、59-66

竹内有一編著『詞章本の世界 うた本・浄瑠璃本の出版事情』日本伝統音楽研究センター研究報告2、京都市立芸術大学、2008

竹内有一・常岡亮・小西志保「新出稀覯の常磐津正本『緑増常磐寿』」『日本伝統音楽研究』16号、2019、136-146

宇野茂男「大量資料の手繕いによる効率的な補修と制度向上 常磐津節正本の修理を通して」『文化財保存修復学会 第41回大会 要旨』2019

竹内有一・常岡亮・小西志保『第五六回公開講座資料』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2020

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 竹内有一、常岡亮、小西志保	4. 巻 16
2. 論文標題 資料 新出稀覯の常磐津正本『緑増常磐寿』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究	6. 最初と最後の頁 136 - 146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹内有一	4. 巻 27
2. 論文標題 ぶたい 常磐津家元所蔵浄瑠璃本の修理から復曲へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 楽劇学	6. 最初と最後の頁 81 - 85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宇野茂男	4. 巻 -
2. 論文標題 大量資料の手繕いによる効率的な補修と制度向上 常磐津節正本の修理を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化財保存修復学会 第41回大会 要旨	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹内有一、常岡亮、小西志保	4. 巻 -
2. 論文標題 「帯文桂川水」解説と詞章	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第五六回公開講座資料	6. 最初と最後の頁 27 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内有一、常岡亮、小西志保	4. 巻 -
2. 論文標題 常磐津家元所蔵浄瑠璃本 調査書目一覧	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第五六回公開講座資料	6. 最初と最後の頁 36 - 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宇野茂男
2. 発表標題 大量資料の手繕いによる効率的な補修と制度向上 常磐津節正本の修理を通して
3. 学会等名 文化財保存修復学会 第41回大会（2019年6月22日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内有一、宇野茂男、常岡亮、小西志保
2. 発表標題 240年を経てよみがえる常磐津二題 常磐津家元所蔵浄瑠璃本の修復と復曲
3. 学会等名 日本伝統音楽研究センター第56回公開講座（2020年2月9日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹内有一、宇野茂男、常岡亮、小西志保
2. 発表標題 報告：史料の発見、修復から復曲まで
3. 学会等名 日本伝統音楽研究センター第56回公開講座（2020年2月9日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 常磐津小文字太夫・常磐津千寿太夫、岸澤式松・岸澤満佐志、竹内有一・小西志保
2. 発表標題 演奏と解説：復曲「緑増常磐寿」
3. 学会等名 日本伝統音楽研究センター 第56回公開講座（2020年2月9日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 常磐津小文字太夫・常磐津若音太夫・常磐津千寿太夫、岸澤式松・岸澤満佐志、竹内有一・小西志保
2. 発表標題 演奏と解説：復曲「帯文桂川水」
3. 学会等名 日本伝統音楽研究センター 第56回公開講座（2020年2月9日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹内有一、細野桜子
2. 発表標題 三味線音楽のイントロダクション
3. 学会等名 日本伝統音楽研究センター2019年度第9回伝音セミナー（2020年1月9日）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 竹内有一、常岡亮、小西志保（共編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 38
3. 書名 第五六回公開講座資料	

1. 著者名 竹内有一編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 常磐津節保存会（文化庁補助事業）	5. 総ページ数 92
3. 書名 『都の錦』 『都の錦・老の戯言』その1 （常磐津節の伝承資料に関する調査報告書2019年度）	

1. 著者名 竹内有一編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 常磐津節保存会（文化庁補助事業）	5. 総ページ数 112
3. 書名 常磐津節演奏者名鑑 第8巻 近代6：明治期から昭和期まで（続）、補遺 （常磐津節演奏者の経歴に関する調査報告書2018年度）	

1. 著者名 竹内有一編著、九世常磐津文字太夫監修	4. 発行年 2018年
2. 出版社 常磐津節保存会	5. 総ページ数 122
3. 書名 常磐津節演奏者名鑑第7巻 近代5：明治期から昭和期まで（下） （常磐津節演奏者の経歴に関する調査報告書2017年度）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>（新聞報道・インタビュー）「常磐津で「お半長右衛門」 桂川への心中物語、京都市立芸大が復曲」 『京都新聞』2020年2月17日朝刊 （新聞報道・インタビュー）「江戸期の浄瑠璃本修復」 『読売新聞 京都版』2019年2月7日朝刊 （講演と演奏）「浄瑠璃の表現技法 常磐津節「将門」を語る」、2018年11月2日、京都アスニー （解説と演奏）「双翼会」（常磐津『巽八景』『屋敷娘』）、2018年9月28日、池坊短期大学 （webコンテンツ）常磐津正本集 京都芸大 竹内研究室編 https://sites.google.com/view/tokiwazu-shouhon/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0 （webコンテンツ）常磐津節の伝承 現行曲調査一覧 https://sites.google.com/site/tokiwazuichiran/home</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	宇野 茂男 (UNO Shigeo) (70554327)	京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授 (24301)	